

東京都現代俳句協会会報

創立三十五周年特集

発行人 山本 敏倅
発行人所 東京都現代俳句協会
〒121-0813 足立区竹の塚1-28-17
今野 龍二
TEL-FAX 03-3859-9304

三十五年の時を感じながら

東京都現代俳句協会 会長 松澤 雅世

東京都現代俳句協会創立三十五周年記念俳句大会・祝賀会はお陰様で盛会に終了することが出来ました。ご来賓に現代俳句協会中村和弘会長はじめ、対馬康子副会長・秋尾敏副会長・柏田浪雅幹事長並びに近隣地区協会の錚々たるお顔ぶれのご臨席を賜りました。重ねて、特別顧問宮坂静生先生にはご講演を頂戴致しました。慶祝に一層の華を添えて戴いた諸先生に心より厚く御礼申し上げます。

振り返りますと、三十五年という歲月は、長いようで短く、短いようで長いものでございました。その時々に応じ一所を懸命に勤めて参ったとは思っておりますが、記念事業を迎えるたびに忸怩たる思いがよぎります。当協会

三十五周年を成功裡に導いて戴きましたのは、ひとえに会員諸兄姉の深甚なるご理解とご協力があつてこそと感謝申し上げます。

会員の減少、高齢化が進む中、当協会が三十五年間一割の会員を維持し続けてこられましたのは、会員の皆様のご尽力はもとより、現代俳句協会全地区協のお力添えと胆に銘じております。急激に変化する時代にあつても、三十五年前に提唱された和の精神と当協会の果たすべき役割と責任に変わりはありません。個々の実作の研鑽を積みながら、啓蒙活動と発展に努めて参りたく思っております。

この記念事業に際しまして、現代俳句協会事務局長永野二三夫氏はじめ事務局員の方々には大変お世話をおかけ致しました。最後に、実行委員役員各位のお骨折りに対し御礼を申し上げます。

都区協 第五十一回

秋季吟行会・

新入会員歓迎会のご案内

今年度新入会員歓迎会を兼ねての秋季吟行会を左記の通り開催致します。新入会員の皆様全員の御参加と多数の会員の皆様の御参加をお待ちしております。

日時 平成三十年九月十五日(土)

午後二時より

午後一時より

会場 上野 グリーンパーク

上野公園西郷銅像横

(上野公園一・五十九)

TEL 03-3828-5571

・京成上野駅より徒歩一分

・JR上野駅より徒歩二分

上野公園界限を自由散策後

適宜会場へ

吟行地

出句

投句締切

会費

申込み

歓迎親会

申し込み

午後一時半

千円(当日)

入賞三十位まで賞品贈呈

句会場に同じ 会費 五千円

〒113-0033

文京区本郷5-13-12-302

長谷川はるか(同封ハガキにて)

TEL 03-3814-11228

創立三十五周年俳句大会 祝賀会報告
五月二十六日
文京シビックセンタースカイホール

東京都現代俳句協会の創立三十五周年記念俳句大会並びに同祝賀会が五月二十六日に開催された。総勢91名の出席者を得た。午後二時定刻に山本敏偉大会事務局次長の司会により開会。開会の辞は佐怒賀正美大会実行副委員長より。続いて松澤雅世会長の挨拶。

御来賓の中村和弘現代俳句協会会長、柏田浪雅現代俳句協会幹事長、戸川晟東京多摩地区現代俳句協会副会長、吉田功神奈川県現代俳句協会会長、岡田一夫埼玉県現代俳句協会事務局長、秋尾敏千葉県現代俳句協会会長、現代俳句協会副会長、対馬康子現代俳句協会副会長、水野三三現代俳句協会事務局長、廣井和之ふるさとテレビ理事からは「今こそ俳句の底力」という激励と祝辞を受け賜った。次は功労者の発表と表彰である。都区協の活動に対し長年ご尽力を賜り、かつ八十歳以上の方が対象とされ、布施徳子顧問、加藤光樹顧問、行川行人顧問、山中正己常任顧問が表彰。謝辞は山中正己常任顧問がなされた。

さていよいよ記念行事の花である東京都現代俳句協会賞が大会実行副委員長でもある山中正己氏より選考経過報告とともに発表された。協会賞には「静かな木」の西本明未氏に。次席は「原野」の栗原かつ代氏にそれぞれ決定。佳作には五名が選出。西本氏に前回受賞の小平湖氏より花束が贈呈された。(受賞者の作品は本誌6ページより)

引き続き俳句大会応募句入賞作品の発表が青木栄子大会事務局長よりなされた。同披講は青木栄子氏、広田輝子氏、櫻木美保子氏、長谷川はるか氏が、同講評は長峰竹芳特別顧問、松澤雅世会長からあり、入賞者には賞状・賞品が授与された。また特別選者十名の特選句には短冊が贈呈された。

そして、いよいよ現代俳句協会特別顧問・「岳」主宰である宮坂静生先生の講演となった。(講演内容は本誌9ページより掲載)

閉会の辞は栗原節子大会事務局次長の挨拶で締め括った。参加人数は五年前よりいささか減じたようだが、会場は常に熱気に包まれ、佐怒賀正美大会実行副委員長、松澤雅世会長、そして多くの御来賓の方々の言葉にうなずき勇気をもたらった三時間余りであった。

この後、今野龍二大会委員の司会による祝賀会に、出席72名。小高沙羅大会委員により開会が宣言され、対馬康子氏による乾杯。一気に座は盛り上がった。歓談続く中、都区協恒例のビンゴ大会。文字通り宴もたけなわの中、青木栄子氏による閉会の辞で御開きとなった。「列席の皆様への感謝と御礼」そして「創立40周年へ向かつて」の声……。

なお、末筆となりましたが、次の方々より御祝儀を賜りました。

対馬康子様、廣井和之様、難波昭子様、埼玉県現代俳句協会様。誌上をかりまして厚く御礼申し上げます。(中内火星・記)

創立三十五周年記念事業基金寄付者芳名

- 二十口 布施徳子
 - 十口 水落守伊 吉田健治 鈴木明 佐々木晃子 赤木日出子
 - 五口 石綿久子
 - 三口 壁谷留宇 岸本陽子 遠藤久子 瀬藤芳郎 中山文字 木村順子 畑乃武子 大山実知子 佐藤あや子
 - 二口 飛水百合子 宮川夏 内藤みのる 平北ジム 太田里子 山地春眠子 小海一郎 袖尾久雄
 - 一口 山田春眠子 小海一郎 袖尾久雄
- (三月・四月分・敬称略・順不同)
ご支援ご協力を深謝申し上げます

創立三十五周年記念俳句大会入賞作品

現代俳句協会会長賞

九九 千年を一行にして滝凍る

荒川区 山本 敏偉

東京都現代俳句協会会長賞

一席

二八七 大寒や明日も使う手を洗う

世田谷区 関戸 信治

二席

一一五七 少年は風より自由麦の秋

江東区 栗原 節子

三席

二五 妻という不思議なものがない秋

江東区 北迫 正男

ふるさとテレビ賞

六二 太平洋がうしろにあって髪洗う

板橋区 小高 沙羅

秀逸賞 (12句)

- | | | | | |
|-----|-------------------|------|----|-----|
| 一三五 | ボクたちのあしたなにいろサクラサク | 豊島区 | 山中 | 正己 |
| 二二三 | すぐそこに繋ぐ手のあり冬すみれ | 大田区 | 青木 | 栄子 |
| 三九三 | 次の世も大根煮たり看取つたり | 横浜市 | 菅沼 | 葉二 |
| 六五四 | 菜の花や杭一本の村ざかい | 北区 | 川西 | 茜舟女 |
| 四二二 | 伊勢海老や百歳だつて脱皮する | 杉並区 | 栗原 | かつ代 |
| 四五一 | 日本を好きであられる日向ほこ | 文京区 | 松澤 | 雅世 |
| 三七六 | 流木は芯まで乾き三・一 | 松戸市 | 岡田 | 淑子 |
| 四一四 | 充電器天につなげば囀れり | 文京区 | 赤澤 | 敬子 |
| 四六七 | あやとりに似たる来し方年暮るる | 北区 | 大山 | 実知子 |
| 五九四 | 「寿命です」仰向けに行く冷蔵庫 | 世田谷区 | 富田 | 敏子 |
| 七四六 | 縄文の壺に指あと風光る | 練馬区 | 櫻木 | 美保子 |
| 七五四 | 投函は秘めごとに似て花は葉に | 港区 | 林 | 暁兵 |

佳作入賞 (32句)

- | | | | | |
|-----|------------------|------|----|-----|
| 一 | ひまわりや種の多さは生き難さ | 渋谷区 | 中川 | 枕流 |
| 七五 | 右の手を揉む左手や冬に入る | 佐倉市 | 相原 | 一枝 |
| 二六八 | 詩人が来てセーターは地図だと言う | 渋谷区 | 中内 | 火星 |
| 三二四 | 不揃の干柿にある自己主張 | 市川市 | 難波 | 昭子 |
| 四四五 | 一日をまあるく生きて帰り花 | 江戸川区 | 石綿 | 久子 |
| 五〇九 | かなかなの思ひのほかの面構へ | 墨田区 | 石川 | 登志子 |
| 五二八 | 黒手袋無くし一つの過去が消え | 板橋区 | 白石 | みずき |

特別選者特選句

- | | | | | |
|------|------------------|-------|-------|-----|
| 五六九 | 春キヤベツ幸せ色と思ひけり | 渋谷区 | 佐藤 | 洋子 |
| 六二九 | 鮭のぼる帰宅困難区域です | 北区 | 山口 | 紀子 |
| 七六九 | 白菜を裂けば海あり山河あり | 杉並区 | 飛永百合子 | |
| 九三八 | 泉から遠いところに鍵かける | 墨田区 | 塚越 | 美子 |
| 九四五 | パン生地を寝かせ勤労感謝の日 | 中野区 | まるきみさ | |
| 一〇〇二 | あんな日があつてこんな日種を蒔く | 板橋区 | 石口 | 榮 |
| 一〇七七 | いくさなき大空がいかにのほり | 板橋区 | 古川 | 塔子 |
| 四五 | 水澄んでペールギユントな朝だ | 足立区 | 今野 | 龍二 |
| 五一 | 大根抜く地球にずぼんと穴あけて | 北区 | 鎌守 | 裕子 |
| 六七 | 枯蓮折れて大空失わず | 結城市 | 山口 | 富雄 |
| 八九 | ロボットのような体操冬木立 | 足柄上郡 | 尾崎 | 竹詩 |
| 一〇八 | あの巫女は八百屋の娘酉の市 | 練馬区 | 今村 | たかし |
| 二四〇 | 老人のふりしてをれば明易し | 越谷市 | 佐藤 | 晏行 |
| 二七六 | 霜柱地球がのびたりちぢんだり | 大田区 | 讃岐 | 幸江 |
| 二九八 | 初蝶のもつれ海から戻らない | 板橋区 | 佐々木 | いつき |
| 三六二 | 指輪はずして夕顔を蒔いている | 目黒区 | 石山 | 正子 |
| 六一八 | 雪搔きにありがとう言ふランドセル | 横浜市 | 永井 | 良和 |
| 六七二 | 大寒に眉間ひろびろしてゐたい | 八王子市 | 広井 | 和之 |
| 六七五 | 革命の兆し二月のメロンパン | 大田区 | 一井 | 魁仙 |
| 六九二 | つまづいて団栗と眼が合っている | 東久留米市 | 佐々木 | 克子 |
| 七二三 | 氷柱鋭し青空のいさぎよし | 吉川市 | 山口 | 明 |
| 七八〇 | 冬夕焼人の顔から昏れてゆく | 柏市 | 星野 | 一恵 |
| 七九〇 | 因数分解ロールキヤベツのくたくた | 杉並区 | 平田 | 恒子 |
| 九三一 | 日脚伸ぶゆつくりやってくる余生 | 佐倉市 | 増田 | 豊子 |
| 九七三 | どの道も冬の海へとつき当たる | 横須賀市 | 芳賀 | 陽子 |
-
- | | | | | | |
|------|------------------|---|-----|----|-----|
| 中村 | 和弘 | 選 | 江東区 | 栗原 | 節子 |
| 六九九 | おんどりの目玉おそろし花の昼 | | | | |
| 宇多 | 喜代子 | 選 | 北区 | 鎌守 | 裕子 |
| 五二二 | 椿落つどこかが揺れている地球 | | | | |
| 宮坂 | 静生 | 選 | 板橋区 | 石口 | りんご |
| 一〇二七 | 雪雪雪男にはないふわり感 | | | | |
| 柏田 | 浪雅 | 選 | 豊島区 | 西本 | 明未 |
| 一〇七 | 人体を宇宙に浸す春の宵 | | | | |
| 吉田 | 功選 | | 渋谷区 | 中川 | 枕流 |
| 秋尾 | 敏選 | | 墨田区 | 塚越 | 美子 |
| 九三八 | 泉から遠いところに鍵かける | | | | |
| 桑原 | 三郎 | 選 | 吉川市 | 山口 | 明 |
| 七二三 | 氷柱鋭し青空のいさぎよし | | | | |
| 渡邊 | 嘉幸 | 選 | 豊島区 | 西本 | 明未 |
| 一〇四 | 一生は潮の満ち引き春の月 | | | | |
| 長峰 | 竹芳 | 選 | 板橋区 | 石口 | 榮 |
| 一〇〇二 | あんな日があつてこんな日種を蒔く | | | | |
| 松澤 | 雅世 | 選 | 墨田区 | 塚越 | 美子 |
| 九三八 | 泉から遠いところに鍵かける | | | | |

創立三十五周年記念

「東京都現代俳句協会賞」選考経過

松井 国史

記念事業の一環として設けられた「東京都現代俳句協会賞」の応募は、新作未発表作品二十句を一篇として求められた。応募総数は二十七編。

選考委員は長峰竹芳、松澤雅世、行川行人、松井国史、山中正己、佐怒賀正美、青木栄子、加藤光樹、加藤瑠璃子、中村和弘、大牧広、松田ひろむ、鈴木明、池田澄子の14名で行われる予定だったが、加藤瑠璃子委員が体調をくずされ、選考には参加されなかった。

選考は作者名を伏せた状態で、各委員が一位から五位までの推薦作品を選んだ。いずれの応募作も力作だったせい、ほほどの作品にも委員の推薦があり、大いに選考が別れていた。ちなみに一位として推されていた作品は以下の九作品あった。

- 13点「無題」 次山 和子
- 18点「原野」 栗原かつ代
- 8点「隅っこ暮らし」 鎌守 裕子

8点「骨壺」

ダイゴ鉄哉

13点「迷路」

長谷川はるか

22点「静かな木」

西本 明未

8点「月光飯面」

石口 榮

11点「無題」

一井 魁仙

13点「無題」

桑田 真琴

一位の推薦はなかったものの赤澤敬子の「構の実」、高橋透水の「春の雷」なども注目された。最終的に四月九日、都区協関係の選考委員、松澤雅世、佐怒賀正美、山中正己、青木栄子、松井国史らにより、協会事務所にて選考集計がなされ、次のような結果となった。

東京都現代俳句協会賞受賞作品

協会賞 「静かな木」

西本 明未

次席 「原野」

栗原かつ代

佳作五編 「寒の月」

今村たかし

14点

「無題」

次山 和子

「迷路」

長谷川はるか

「無題」

桑田 真琴

「果てしなく」

赤羽根めぐみ

13点

以上の方々の顕彰は、平成三十年五月二十六日(土)文京シビックセンターにおける東京都現代俳句協会創立三十五周年式典にて行われた。

Dブロック吟行会のご案内

開催日時 平成三十年十月八日(月) 祝日

吟行地 道場寺、三宝寺及び石神井公園

付近

集合時間 午前10時

集合場所 西武バス「三宝寺池」バス停

交通手段 J R「荻窪駅」から西武バス⑬長久保行で約25分、西武新宿線「上井草駅」から長久保行で約10分、

西武池袋線「石神井公園駅」から

徒歩約15分

句会場 石神井公園ふるさと文化館

出句締切 嘱目二句、十二時半

句会費 千円

講話 顧問 松田ひろむ先生

懇親会 当日案内(約二千五百円)

参加申込 十月二日(火) 締切

連絡先

今村たかし 〒177-0011 練馬区石神井町

3-27-6 Eメール imataka@dream.com

櫻木美保子 〒177-0044 練馬区上石神井

3-3-22 TEL/Fax 03-5999-1187 08

西本 明未 〒171-0052 豊島区南長崎

3-40-6 TEL/Fax 03-5999-6509 5

東京都区現代俳句協会賞・受賞作品

静かな木

西本 明未

体内の空は真つ青風花す
存在を青空に問う冬木かな
振り向けば控えし夜汽車雪催
大枯野命はいのち生みつづけ
誰もいない幸福な街雪しんしん
胎児期のヒトに尾はあり春隣
薄氷や底にはいつも熟れし水
セロファンを重ねる痛み春の雪
春の水抱いてわたくし母となる
日の匂い子のポケットから春の雲
列島を花の容にしてしまふ
過去未来繋ぐ日常春の雲
万緑に水の手応え滔々と
里山に鎖をほどく大夕焼
切り株にすだま寄り添う白夜の地
大空に抱きとめられた夏帽子
八月に十字架を足す静かな木
澄むように息したように星流る
胡桃割るどの部屋も空一つずつ
羊水は原始なる水望の月

東京都区現代俳句協会賞・次席作品

原 野

栗原かつ代

血のなかの民族いくつ熊祭
神々の原野全き冬夕焼
囲炉裏の火ピリカ母系を匂わせて
尾白鷺とつくに見透かされている
現へとしまふくろうの翻る
路の臺コロポックルのなごむ森
葦の角丹頂の巢のけはい消し
ぼつぼつと牛舎延々と春泥
摩周湖の白い奈落へ蝦夷桜
蛇行する川をはみ出し柳絮飛ぶ
白樺はアイヌの骨か風五月
人入れぬ森から鹿の子川渡る
海霧深し人の国境のあいまい
ぼろぼろの夏毛おねだり母狐
羅白岳くろくろ夏霧を抜けだして
まぼろしの領土の蒼く秋気澄む
アカゲラや原野の果ての地藏尊
でこぼこの笑顔のかこむ零余子飯
ははそもみじ摂理を護る山おやじ
木の実降る森の宴のウポポポ

東京都現代俳句協会賞・佳作作品

寒の月

今村たかし

風鈴の鳴らず鳴らせて子をあやす
噴水の高さに見えて秋の風
弁天に万の枯蓮万の風
金銀の鯉の見てゐる紅葉かな
三島忌やピアノ連打の乱れ髪
起重機の音の重たし雪催
皆野には余る句碑あり雪女郎
何なくも秩父に兜太雪虫
拳銃の婦警の腰に冬の蠅
寒の水吐き出す龍の動かざる
大寺の昔戦場冬木立
陽の休む松の根方や実万両
大黒の紅引く一日石路の花
落葉掃く男のうしろ落葉散る
葉には余る篠懸落葉かな
赤シャツの走者老人冬紅葉
つ舞またひとつ舞落葉散る
逆光に枯れて華やぐ芒かな
銀杏をさらふ女の及び腰
厠より友と見てをり寒の月

無題

次山 和子

目借時などと針目の整わず
マネキンに心音宿る春の宵
この町にこんなに桜あつたとは
画集に裸婦戦さ確かに終りし夏
花かぼちやまずは焼土に起ちしこと
柿若葉開いて閉じて赤子の手
青年の汗の臭いに追い越さる
炎帝や水瓶の地に摩天楼
カセットで踊唄などビルの間
空洞の胸突き抜けて秋虫
魂祭家紋の謂れ知ること
五十年研ぎさし刃先鯛鳴く
ぬくめ酒談笑消さる線路端
懐手男ことばになつてゐる
屋上の菜園に引く蕪の赤
庁舎出て落葉だまりをハイヒール
寒晴れや球子の富士の面構え
買初めは白足袋びしと歩むため
日脚伸ぶ波ふつくらと神田川
痛癒えて今煌めきの待春を

迷路

長谷川はるか

一本の糸から紐に春立ちぬ
植多そびれたる球根の芽吹きけり
涅槃西風ここの標準語は鳥語
開けたならばつと散りさう雛あられ
チューリップ並ばなくてもいいんだよ
をととひが食べ頃だつた梅雨草
温顔の無慈悲になりて毛虫焼く
片陰に入りて己を見失ふ
風鈴のなかに空あり風があり
彼の世より落とせる翳や黒揚羽
反骨てふ骨の歩める炎天下
腐れ縁みんな切つたら秋の風
木洩れ日のこの手触りも竹の春
耳鳴りはガイガー計器星月夜
垂乳根を勲章となす黄落期
掴みしと思へど虚空落葉降る
自己中の天動説やクリスマス
炬燵てふ魔物に半身喰はれをり
人はみな等間隔の冬の杭
待春のQRコードの迷路

東京都現代俳句協会賞・佳作作品

無題

桑田 真琴

悩む人なんじやもんじやの花の咲く
五月雨のキャンバス立ててまだ描かず
守宮来て半透明のふたごころ
苦瓜煮る今日の体を休ませる
夜生きる人多き街蜘蛛の糸
地場産業早の坂を御用聞き
IT系人材過多のビル西日
再開発待ちぼうけビル鳥渡る
脳天酷暑野望も愛も消え失せる
いざこざの中の暮らしや草を引く
佃煮は佃茂と決める白団扇
勝手口淡く気高く子かまきり
秋高しプリズム光る測量士
柚子坊の悪相やがて雨あがる
構想段階秋の行方のごと生きる
豇豆光る平凡な日に炊く赤飯
解決という名の終わり寒月光
石積みの一子相伝寒の月
新年祈念聖地へ青い古代河馬
一月の白い道筋白い影

果てしなく

赤羽根めぐみ

果てしなく詰めて冬日の莢に猫
女らのコートは椅子の舌となり
ペン立てにペンの凭れる風邪心地
手にあたるもの搔き出して二月なり
谷間の眩しさペンで梅を指す
愛の日の数字の消えている定期
春の月本屋の人に間違われ
殊更に訛る花時の依頼
囁りに付箋を付けすぎて眠い
こどもらは離れて座る竹の秋
アイスコーヒー考え過ぎている滴
無重力なるハンカチと定期券
苦瓜のまだ短くて猫の腹
食卓に台風配膳してありぬ
座りたきこどものくねる秋桜
友の来て花野に捨てる絆創膏
鳥渡る寸胴鍋の中は水
逃走犯めきて寒夜のマネキンは
冬満月果物籠に入らざる
雪原を抜けて夜通しのミシン

✳ 受賞者のことば ✳

協会賞「静かな木」

西本 明未

思いがけず賞を頂き、驚きとともに感謝の
気持ちでいっぱいです。これもご指導くださ
る先生方、先輩方、励ましあう句友達のおか
げと思っております。ありがとうございます。
これからも作句する愛おしい時間を大切
に歩んでいけたらと思います。



略歴
東京生まれ。
所属結社「紫」「白」「菌車」。
現代俳句協会員、日本児童文学者
協会員。

次席「原野」

栗原かつ代

この度は、東京都現代俳句協会三十五周
年記念俳句大会の作品賞次席賞を戴き、とて
も嬉しく感激致しております。先達の方々に
導かれ、やっと俳人の末席をうるちよろし
る私ですが、この賞を励みとし、より一層勉
強致したいと思います。有難うございました。



略歴
平成十年「野火」細井みち氏に師
事。現代俳句協会・「山河」所属
第五十七回長崎原爆忌平和祈念
俳句大会口語俳句協会会長賞受賞。

◆記念講演

俳句の核心は「あいまいさ」

——兜太の仕事

現代俳句協会特別顧問 宮坂 静生

◆はじめに ・1960年(昭和35)安保体験者の悩み(高揚感の閉塞状態へ) ・人々との新たな人間関係の模索(国と国との新たな国際関係の構築)

私が俳句を始めたのは昭和26年、新制中学二年、14歳の時でした。その後新制の信州大学文学部に進学。三年生の時には全学連信越地区の代表に、籤引きで当たってしまいました。

それがどういう時代だったか。昭和29年3月1日、太平洋マーシャル諸島でアメリカの水爆実験が行われ、第五福竜丸の23名の乗組員が被爆。翌30年、広島から第一回原水爆禁止運動が始まります。昭和33年、第四回原水爆禁止運動を全学連が進め、私は砂川基地へも行きました。私は当時、富安風生の「青葉」で句作しておりました。風生先生は寛容な方でしたけれど、社会的なことを詠みたい私にとっては、老境に入っただけでいらした。昭和6年、水原秋櫻子が有名な論文「自然の真」と「文芸上の真」を書いて、「ホトトギス」から離れます。そして新興俳句運動が始まります

が、そのことが虚子の意識にあつたんでしょね。昭和8年、風生先生の処女句集『草の花』の序文に虚子は「富安風生は、過激にもならない、さりとて平凡にもならない、中道を歩く俳人だ」と書いている。風生先生は師心は、物を作るのに中道なんていうことがあり得るのかと。生涯、風生先生は水原秋櫻子とも大変親しくしていたのは、虚子のこの「中道」に対する反発だったのではないかと私は思います。それ以後富安風生は、虚子門下でありながら、悉く反旗を翻す。

そして、六〇年安保です。昭和35年6月15日、樺美智子さんという東京大学の女学生が、全学連のデモと機動隊の衝突により亡くなります。私は樺美智子さんのお父さんの樺俊雄先生に二年間教わりましたので、非常なショックを受けました。それまで私は、人間の死ということあまり意識しておらず、戦後の社会は生きている人たちだけで成り立っていると思つていた。ところが樺美智子さん

のひとりの死、社会的な死と言つていい。あの日の境に、日米安保条約の改定が成立し、世の中は掌を反すように、保守的になっていきます。俳壇も同じですね。昭和28年、中村草田男の第五句集『銀河依然』を端緒に、社会性俳句に火が点きました。金子兜太は「社会性とは態度の問題」として、それが「造型俳句六章」に表されていきます。その社会性俳句運動は、昭和35年6月15日を境に、退潮してきます。

・昭和20年代 俳句の根源探求
炎天の遠き帆やわがこころの帆 誓子

・昭和30年代 社会性俳句
彎曲し火傷し爆心地のマラソン 兜太

・昭和40年代 伝統回帰
一月の川 一月の谷の中 龍太

・昭和50年代 高齢化社会へ「軽み」(日常重視)
それぞれの年代の象徴的な句を挙げました。
「彎曲し火傷し爆心地のマラソン」は、金子兜太の一番象徴的な俳句だと思います。戦争体験を課題として詠っていますね。

昭和40年代には、飯田龍太の「一月の川 一月の谷の中」に象徴されるような「伝統回帰」。社会性俳句は人と人のつながり、空間的な広がりや問題をしますが、伝統というのは時間

という縦の問題を主にした。一月の川が一月の谷の中を流れている、こんな単純明快な句を作れば、これ以上の句はもうできないと思います。龍太さんはこの句の後しばらくして、結局「雲母」をやめてしまいました。

昭和52年に、日本は当時男性73歳、女性は78歳という世界一の長寿国になります。高齢の俳人たちが、その老いを実に巧みに句に詠まれる。日常を重視する「軽み」に向かうのは自然の流れでしょう。以後この流れは、平成の今日まで続いています。その中であって私は、樺美智子さんに代表される死者がいて初めて、今我々が生かされているんだという気持ちがあったんだん強くなって、どのように自分の俳句を作ったらいいかを、盛んに考えました。

1. 明晰よりあいまいさへ

『今日の俳句』（カッパブックス・昭和40年刊）昭和40年に刊行された、兜太さんの『今日の俳句』。これを読んで僕はびっくりしたんです。僕の習ってきた俳句は、対象に忠実に、明快にという作り方です。ところが俳句は、明快じゃ駄目だ。あいまいな、難解なものが必要ならば、今日の俳句なんてものはあり得ない、そう書いてあるんです。

原句 青年強し干潟に玉葱腐るとも

添削 強し青年干潟に玉葱腐る日も

添削後の句、「青年強し」ではなく、「強し青年」と、戦後における青年を言っています。「腐るとも」ではなくて、「腐る日も」、「来る日も来る日も」です。ここに「あいまいさ」が加わって俳句は完結したと書いてあります。あえて言う、「強し青年」という主題を掲げて、「干潟に玉葱腐る日も」、それが金子兜太の戦後だったのではないか。いかに明快に俳句を詠むかという個の問題から、「あいまいさ」、「難解さ」によって、全体の大きな問題になるんだと。託された大きな問題が、戦争は悪である、反戦、平和ということでしょう。

2. 「あいまいさ」とはなにか 土から触発された純粋衝動

平成10年、「岳」20周年で、兜太さんが「俳句の現代」という講演をしてくださった、雪月花、花鳥諷詠、有季定型、文学的に整然と呼ばれるそれらのはるか昔、いまだ混沌たる季節感、それらが臍気ながら五七五というリズムと結びつくかどうかさえも判然としない。けれども花線列島で人々は、季節を迎える喜びのリズムを身に付けながら生きていたわけ

です。それら土に根差したあいまいさこそが、自分の大事にする美観だと言うんです。象徴的な句が、「おおかみに螢が一つ付いていた」だと思えます。先ほどの「彎曲し火傷し爆心地のマラソン」という句に、この句の美観をプラスすることによって、金子兜太の存在というものがあがる。明治38年に東吉野村で、最後のニホンオオカミが捕獲されました。かつて畑を荒らす動物の退治に大事にされたオオカミはしかし、人間に危害を与えると駆除され、ついに絶滅してしまいました。一方で秩父の三峯神社のように、大口真神として信仰の対象にもなる、そのオオカミです。螢もまた、日本文学の中では人間の魂だと大事にされた。

『後拾遺和歌集』にある和泉式部が詠んだ有名な歌がありますね。「物おもへば沢の螢も我が身よりあくがれいづる魂かとぞみる」。兜太さんはこの句が、自分にとって一番、身に沁み込んだ美観だとおっしゃっていました。

3. 金子兜太の宇宙・大峯あきらの宇宙

昨年角川の『俳句』七月号で、大峯あきらさんと金子さんと対談をしてみました。このお二人は本当に水と油のように、お互いに本音でもって言い合うんですねえ。お二人

の宇宙観がこちらです。

兜太 宇宙の本体を浮遊する「スピリット」とみて、その結節点に存在するものを信じる。「スピリット」を力ともいい、土や水など地上的なものから離れない、超越感をもちたい。あきら 人間はどこから来てどこへ行くかわからない。人間の力を越えた阿弥陀の救いの存在を模索する。宇宙における地球のあり方が本質的な孤独だという超越感をもつ。

大峯さんは結核のため臥せっていた17歳の時に仰ぎ見た吉野の降るような銀河に、銀河に囲まれた中に地球があると思いついたそうです。銀河とは阿弥陀様だと思つたと。そういう考え方は金子兜太にはない。しかしながら、言い方は違うけれども、二人に共通するのは、難解さ、あいまいな美観を持たなければ、俳句を作る意味がないということです。

4、季語体系の背景に「木の根開く」

〔「根開き」など地貌季語の混沌を想定する〕

私は「地貌季語」という形で、日本人が持つ美観というものを掘り上げたいと思います。「木の根開く」、「根開き」、これが僕は原点になる言葉だと思えます。北国で、春先に春楡や落葉松の大きな木の根から、丸いドーナツ

状に雪が溶けていく。根は「根の国」、死者の世界と生者の世界との支え、支えられる関係を自然に受け入れる欲びにもつながります。私の句「逝く母を父が迎へて木の根開く」は、父が76で亡くなつて母が98で亡くなり、二十年ぐらい違うものだからね。父と母は生前何かというとお金がないと喧嘩していた。せめて、あの世では優しく暮らしているだろうなと思ひまして。

私は日本というのは、北の文化、中の文化、南の文化、いくつもの日本を考えていかなければ、これからの世の中は考えられないと、「再考・季節のことは」を書きました。その後押しをしてくれたのが、金子兜太の「あいまいさ」「難解さ」という大事なテーマです。金子兜太が俳句で昭和40年から言い出した「曖昧」という概念が今、最先端のテーマとして論じられているそうです。「あいまいさ」「難解さ」を我々は俳句で抱えていかなくてはいけなないと、金子兜太は身をもって追求してきた。そのことに心から尊敬の念を表し、その一端を現代俳句協会の中心をなしている都区協の35周年でお話できたことを大変うれしく思います。ありがとうございました。

(拍手)

第55回現代俳句全国大会 作品募集

投句締切は
7月31日(必着)

□応募規定 三句一組・二〇〇句
何組でも可。ただし、新作未発表作品に限る。
前書き不可。所定用紙使用。〒、住所、姓号、
電話番号、協会員・会員外の別を明記。投句
限は定額小為替(無記名で)又は現金書留に
限る。(必ず作品同封の事)

□送付先 〒619-0241 京都府木津川市兜台5-1-13
木津かごと台14-101 上藤おさむ方 第55回現代俳句
全国大会 係 ☎0774-17218584

□締切 7月31日必着
□顕彰
優秀作品(三賞及び秀逸賞等)を協会の機関誌「現代俳句」に発表するほか、協会刊行物に採録

□賞 大会賞、毎日新聞社賞、特別選者賞、秀逸賞、佳作賞

□全国大会
平成30年10月27日(土) 午後二時より
ANAクラウンプラザホテル京都
〒604-0056 京都市中京区堀川通一茶城前
☎075-12311155

□記念講演
竹田美喜氏 松山市立子規記念博物館館長
演題 明治28年の子規と漱石―蕨院佛庵の52日―

□講評
現代俳句協会会長はじめ協会幹部
懇親会 午後5時より(会費8千円)

お二人様3組(9句) 同時投句に限り、
投句料6千円のところを5千円といたします。

主催 現代俳句協会 後援 毎日新聞社

第十六回高田馬場春期句会報告

平成三十年四月三日(火)

兼題「春泥」・席題「木」

《高得句点》

春の泥つけて百まで生きられる 松澤 雅世
 春の泥ぽこんとまごが子を生んだ 敏守 裕子
 言霊を積木している春の昼 山本 敏倅
 父と乗る回転木馬三鬼の忌 青木 栄子
 春泥を踏み合格の掲示版 次山 和子

《参加作品》(順不同)

真ん中はあなたに譲る紫木蓮 相沢 幹代
 幼子に地球の温み春の泥 西本 明未
 砂の城忽ち崩れ啄木忌 小林 和子
 木道をひらがな泳ぎして初蝶 白石みずき
 春泥や弥撒へと急ぐ漁師妻 高橋 透水
 花過ぎの私ひとり静かな木 山中 正己

接木してあと何年の恋を継ぐ 今野 龍二
 春泥をよけそこなえし我が余生 棚橋 麗未
 シャンシャンの春泥まみれ母まみれ 栗原かつ代
 花水木光りの重さ乗せて散る 広田 輝子
 紫木蓮義理を欠くこと増えており 江原 玲子
 木簡に恋の字なくて桜散る 松田ひろむ
 春泥を飛び割烹着の母に会う 小高 沙羅
 燕にも好みの若木宙返り 宮川 夏
 桜木や散るを急かれし昭和見ゆ 鈴木 光子
 出来たての春泥知らぬ人と見る 櫻木美保子
 ひさびさの孫の重みや春の泥 大山実知子
 木偏に木重ね重ねて木の芽時 中内 火星
 春の泥GPSにはわからない 山口 紀子
 春泥や行列長きラーメン屋 近田 吉幸
 春泥にスパイクのあと草野球 上野 貴子
 春泥にはしゃぐ子供ら通学路 磯部 薫子
 ブルドーザー春泥に足取られ ダイゴ鉄哉
 (宮川 夏・記)

高田馬場句会「秋」の御案内

日時 平成三十年十月二日(火)午後一時より
 会費 千円
 場所 JR高田馬場駅前F1ビル8階
 兼題 「案山子」
 参加申込 宮川夏 080-345212577
 訂正とお詫ひ

創立三十五周年記念俳句大会作品集
 13頁 九四五 まるきみさ
 会報一七五号 5頁 近田吉幸作品
 菜の海に夷隅鉄道泳ぎけり
 編集後記
 ○今号は三十五周年記念特集号です。関係各位の皆様のご協力に心より御礼申し上げます。
 ○秋季吟行会・新人会員歓迎会へご参加の返事は同封ハガキをご利用ください。
 ○今号より広報部長は今野龍二から中内火星が引き継ぎました。よろしくお願ひ申し上げます。
 (中内火星・記)

悼 哀

布施徳子氏 享年八十三歳

東京都現代俳句協会顧問・布施徳子氏は去る五月十九日ご逝去されました。氏は長年に亘り会計部長、副会長、顧問と当協会の為に多大な貢献をされ、この度の創立三十五周年記念俳句大会に於いて功労賞をご受賞の直前でした。心より御冥福をお祈り致します。

広報部・編集室

〒150-0013 渋谷区恵比寿
 二一三三一五一一〇二 中内火星方
 tel&fax 〇一一三四四〇一四四七九
 Eメール ham@mx3.ttcn.ne.jp